⑦ 国別俳諧摺

江府其一

乙未春

人の来て人のかへりぬ秋の暮　扇和
春の鴨ゆら〳〵暮てなかれけり　丁知
ほと、きす山と木立のみゆるのみ　麻交
舟駕のき、頃もとくと子規　有月
雪々に畔の高ひく直りけり　抱儀
喰つみやよく見さためた置処　白起
月の汐入江は高くなかれけり　龜稈
雪解の風か吹なり波のうへ　斗筵
目にさはる土竜のみちや入梅の内　ちかき
案内者の手はしめしたり小松曳　春騏
山茶花やこほれて垣の一けしき　はるき
主従の入乱れけり花火船　南濤
寒さうに見ゆる遠山桜かな　雪鷺
坂なりに結ふた垣根やうめの花　いち楼

仮名翁

江府其三

乙未春

降物も焚けは燃るや神無月　鳳朗
落葉にも若樹は物をいうへけり　一具
埋火をかきちらしけり木賃たち　禾木
こからしやおさなき声のむきみ売　大梅
野花はや今の今まて有し不二　得蕪
葉の風に眼の休まりし牡丹かな　粗文
初秋や情出す大工左り利　應々
燃出して詮なき炭の崩れ哉　護物
田の中にしけ〳〵芽はる柳かな　春路
秋の日の長く短かくつまりけり　史千
思ひ立て行燈はるや今朝の秋　惟草
鶯の声には松の高さかな　禾葉
かたつらは日にほとけしや垣の霜　久臧
高けれは木さへ折る、に紫苑かな　梅室
鯛かこふ納屋の明りや大晦日　一楼

仮名翁

上州信州北国筋

乙未春

蜩や焚おろしたる舟の飯　鹿太
牡丹見のもたせて来るや替草履　逸渊
声かけて見れは人あり露の宿　圭布
旅人もよこれて行や苗の泥　叢
夕顔の花にあかるき後架かな　白兎
ほたん見てはつみの付し料理哉　萬里
水音は下にありけり天の川　貫魚
梅咲やしら波立てわたる馬　とら風
江の末のしよろ〳〵落や鳴水鶏　呼帝
能登関は吸筒提て小松曳　一楼

仮名翁

両総

乙未春

田の中に花火の櫓残りけり　皎雪
人かけの障子にさして菊匂ふ　呼牛
起されす起けり硯洗ふ朝　松什
今来たか来たにはならす稲雀　兎卿
年若う見られてうれし菊の花　幻芝
根ん尽て蚊を焼心うせにけり　江月
髭剃れとす、められけり初袷　比古
山笑ふまてになりけり今朝の雨　双居
くらくともわかるやあれも花かけり　之桂
よし切やとれも井戸なき家はかり　巴陵
袴着て巨燵にはいる二日かな　子行
証人に引かれて行や帰り花　桐雨
春の猫女あるしのもてあまし　一楼

仮名翁